

[資料] 1605年慶長地震・津波に関する既刊地震史料集の 全史・資料の目録(史料等級を付した表)

神戸大学名誉教授 石橋 克彦*

A Catalog of All the Documents on the 1605 Keicho Earthquake and Tsunami Printed in the Collections of Historical Earthquake Materials

Katsuhiko ISHIBASHI

Emeritus Professor, Kobe University

Almost all of Japan's known historical documents on earthquakes have been transcribed into 33 volumes of the Collections of Historical Earthquake Materials. However, the Collections contain a mixture of reliable and unreliable documents, and explanations of documents are insufficient. Therefore, it is necessary to prepare a catalog of all the documents contained in the Collections in order to help researchers utilize the Collections properly and efficiently. In this paper I made a catalog of all the documents on the 1605 Keicho earthquake, which produced large tsunamis on the Pacific coast of central and southwest Japan. I examined all the historical documents on this event printed in the Collections adding nine unpublished ones, and prepared a table of all the documents with bibliographical information, rank suggesting the reliability, place of mention, and other comments for each of them. The number of documents is 100 in all. The number of rank A and A' documents (contemporary and semi-contemporary) is only 11 among 100, and 40 documents have been ranked as D, which are modern materials describing the 1605 event not based on historical records and cannot be regarded as historical documents. This result shows again the problem with the existing Collections. The investigation of the 1605 Keicho event, which is very important for elucidating the recurrence pattern of the great Nankai trough earthquakes, should be done based mainly on the rank A and A' documents through strict historical source criticism.

Keywords: Collections of Historical Earthquake Materials, Catalog of Historical Documents, 1605 Keicho Earthquake and Tsunami, Rank of Historical Document.

§ 1. はじめに

日本の歴史地震研究の基盤が、明治以来の史料収集の集大成としての地震史料集であることは言うまでもない(収集は今後も続くが)。しかし、筆者がたびたび指摘しているように[例えば、石橋(1995, 2005), Ishibashi (2004)], 既刊地震史料集の中味が玉石混交なのが大きな問題である。同時代史料と後世の二次史料, さらに史料とはいえない近現代の郷土誌などまでが、同列に収載されている。

したがって、質の高い歴史地震研究を進めるためには、既刊地震史料集は史料のインデックスであると考えて、あらためて一つ一つの史・資料について原典に遡って史料批判をおこない、史・資料の取捨選択をしなければならない[石橋(1995)]。

しかし、その作業をするためにはせめて「史料目録」が欲しいところだが、既存の地震史料集はそれも不

備である。『増訂大日本地震史料』[武者(1941)など]では基本的に史料の典拠や書誌情報が記されていないし、『新収日本地震史料』[東京大学地震研究所(1982)など]でも情報が不十分である。そのために、史・資料の原典に遡れない場合が少なくない。

石橋(1995)は、かねて提言していた地震史料集の全文データベース化と並んで、すべての地震史料について、史料の基本的性格がわかるような「史料目録」の作成を提案した。いっぽう上田・他(1996, 1997)は、『新収日本地震史料』にたいして「史料検索のためのデータベース」を試作したが、同史料集の情報しか含んでいないので「史料目録」としては不完全だった。また山中(2015)は、既刊地震史料集の史料を検索するためのデータベースを作成し、オンラインの「歴史地震史料検索」システムで多項目の検索を可能にしたが、「史料目録」とは目的が違う。

* 神戸市在住
電子メール: ishi@kobe-u.ac.jp

最近、歴史地震研究に取り組む歴史研究者が増え、『新収日本地震史料』などが歴史研究者には使いにくいという声が強まって、『歴史学による前近代歴史地震史料集』の作成などが始まっている[矢田(2015)]. 矢田(2015)は、どのように使いにくいのか説明していないが、歴史研究者は近現代の文献などは中味を見るまでもなく無視するのかもしれない。

しかし、今後も大多数の歴史地震研究は既存の地震史料集を用いておこなわれるだろうから、「史料目録」の整備は依然として重要な課題だと考えられる。これは、地震史料の全文データベース化[例えば、石橋(2009)]とは違って、個別的な歴史地震研究で各研究者が心掛けてゆけば、それらの集積が歴史地震研究コミュニティの財産になってゆく可能性がある。

筆者は、かつて1812年文政近江地震の全史料の整理をおこない[石橋(2011)], また1596年伊予・豊後地震の研究では、まずその地震の全史料の整理を示した[石橋(2019c)]. 本報では、基本的に後者と同様のスタイルで、慶長九年十二月十六日(1605.2.3)夜の地震・津波(以下、本地震または本津波)について、既刊地震史料集に収録されている全史・資料の表を作成し、「目録」として参考に供したい。

既刊地震史料集の精選を企図した「[古代・中世]地震・噴火史料データベース(β版)」(以下、地震史料DB)[石橋(2009); 古代中世地震史料研究会(2017)]が古代・中世(便宜上1607年2月まで)の既刊全史・資料に対して簡便な等級付けをして目録的な整理もしているが、本地震に関しては作業が完了していない。したがって本報は、それを補完する意味もある(史料本文は対象としないが)。

なお本地震は、房総半島～鹿児島県の太平洋岸に大津波をもたらした。通説では南海トラフ沿いの津波地震とされるが[例えば、石橋(1983), 宇佐美・他(2013)], 石橋・原田(2013)は小笠原海溝沿いの巨大地震ではないかという作業仮説を提出した。また松浦(2013)は、震源域を特定しなかったが、遠地震の可能性を指摘した。このように本地震は、基本的な地震像がいまだに確定しておらず、既存および新たな史料を駆使した更なる調査研究がとくに求められる。その際には厳重な史料批判が不可欠であり、その前段階として本報が参考になれば幸いである。

§2. 全史・資料の表

本地震について既刊の地震史料集——『増訂大日本地震史料 第一巻』[武者(1941)], 『新収日本

地震史料 第二巻, 同補遺, 同続補遺』[東京大学地震研究所(1982, 1989, 1993)], 『日本の歴史地震史料』拾遺, 同二, 同三, 同四ノ上』[宇佐美(1998, 2002, 2005, 2008)]——に掲出されたすべての史・資料を、表1に示す。

数え方にもよるが、武者(1941)に24点、東京大学地震研究所(1982, 1989, 1993)に各47点、6点、2点、宇佐美(1998, 2002, 2005, 2008)に各9点、1点、1点、1点、合計91点が印刷されている(複数の史料を含む書籍が1つの史料名とされている場合は個々の史料に分けた。また重複収録されているものは除いた)。

表1には、筆者が知る未刊史料9点も加えた。

2.1 表の構成

表1の構成は次のとおりである:

第1列: 史料集ごとの通し番号(史料集中の掲載順)。武者(1941)において田山(1904)を踏襲した史料は番号に下線を付し、東京大学地震研究所(1982, 1989)において都司(1979, 1981a, b)から再録した史料は番号に▽を付して、先行の努力を明らかにした。

第2列: 史・資料の名称。史料集のとおりなので、史料を収載している書籍名などの場合がある(それらは史料地震学で用いる史料名としては適切ではない)。

第3列: 各史料集に記されている史料の情報。史料名の下に注記と巻末の「出典」の記述の両方を示す。

第4列: 本報で付した史料等級。2.2を参照。

第5列: 史・資料が言及している地点・地域。

第6列: 本報で新たに記す史料の説明。どんな史料かわかる程度で、詳しい史料解題ではない。史料等級Dのものについては、Dと判定した理由を簡潔に示した。この列で引用した論文と「*」で示す刊本は、文献欄に掲載した。

なお、史料等級A・A'の史料は**第1・2・4列**を太字にし、D級とZ級史料は行全体を網掛けにした。

2.2 史料等級

地震史料DBが、各史料の信頼性を評価する簡便な指標として「史料等級」を付している(地震史料DBの「構成と使い方」の「補足」の「史料等級について」を参照)。本報でも、それを参考にしてすべての史・資料に以下のような「史料等級(Rank)」をつけた。

A: 本地震と同時代に書かれた記録(日記など)や文書(書状など),

A': Aに準じる記録・文書,

B: 江戸時代に作成された記録・文書・典籍。適切

な史料批判を経て研究に活用できる場合がある、

C: 明治時代以降に作成・刊行された記録・書籍等。稀に、逸失した古記録等を記すものがある、

D: 明治時代以降現代に至るまでに作成された文献で、根拠史料のない(または単なる孫引きの、または誤引用の)記述だけで、史料とはいえないもの。D級文献の内容の具体例を示すと、表1で筆者が「不正確な近現代の記述」とした『S16 田野文化史』は「慶長九年(一六〇四年)二月大地震あり、夜半に大津波起って、田野平野は一面に海水が入って、潰家や死者も相当あったようである」と記す(史料の裏付けなく、誤記あり)。また筆者が「杜撰な近現代の叙述」とした『S20 森村史』は「慶長の地震 慶長九年(一五八八)十二月十六日土佐の大地震で佐喜浜のみでも三千八百六名の死者を出したとの記録がある」と記す(『M9 置文寫』の誤引用と誤記がある)。

Z: B級史料ではあるが、本地震とは違う事象について述べているもの。具体的には、慶長十年十二月十五日(1606.1.23)の八丈島付近の海底噴火(?)だけを記す S38, S46, Ua7。また後世のB級史料で、先行史料を写しただけの Sh5, Ua4 もZとした。

なお、史料等級A, A', Bは史料自体については機械的に判断したもので、記述内容の信憑性を評価したものではない(C・D・Z級については内容を勘案して振り分けたが)。これらの史料を用いた実際の研究の際に独自に史料批判をするべきである。

§3. まとめ

本報は表1を目録として提示することが目的なので、特段の議論はないが、まとめとコメントを記す。

表1では、既刊地震史料集の91点の史・資料のうち、A級は8点、A'級は3点にすぎない(M9が「A', B」となっているのは、主要部分が本津波直後に書かれた置文の忠実な写しだったとしても、明らかな後人の追記があるからである[石橋(2019a)])。またB級は27点(「Bか」と「B/C」を含む)、C級は8点である。そして、D級が40点にも達し、Z級が5点である。追加した未刊史料9点はすべてB級である。

D級が非常に多いのは、既刊地震史料集が玉石混淆であることを改めて示すものだが、史料集としてはやはり問題であろう。これは、“地震”や“高波”といった文字があれば、史料とはいえない近現代の文献まで悉皆収集するという考え方が根強かったためだが、既刊地震史料集がそういう性格をもって、ほかの地震でも信憑性の低いD級文献を多く収録して

いることを再認識したほうがよい。

なお筆者は、例えば古代・中世の地震に関して、近世の二次史料を孫引きしただけの(さらには誤引用している)近現代の郷土誌などは地震史料集から除くべきだと思うが、いったん史料集に収録されてしまった以上は、「素性」を示さないで削除するのはよくない(混乱を招く)と考えている。現状は、「素性」不明で確認も困難な資料が多いのが問題である。

D・Z級を除いた既刊史・資料46点と未刊史料9点について言及地点(地域)をみると、複数地点が5点、房総地方が9点、八丈島が7点、武蔵・相模が1点、中部地方(伊豆～伊勢)が5点、紀州・淡路が4点、四国が23点、九州が1点、である。被災範囲が広域だったのに言及地点が局在しているのは、本地震津波の時代的背景(江戸開府直後で社会が不安定だったこと、宝永・安政津波で記録が失われた可能性があること)を顕著に反映している。

また、上記55点の史・資料のうちA級が8点、A'級が3点というのは、例えば1596年伊予・豊後地震の既刊史・資料57点(D級以外)のうち14点がA級、2点がA'級だった[石橋(2019c)]のに比べて少なく、これも本地震の特性を反映していると思われる。

従来は、新史料収集の重要性が強調される蔭で、史料の素性を確認して目録を作るといった作業は軽視されてきた(というか、考えられなかった)。しかしこれは、収集した史料の整理としても重要であり、今後の歴史地震研究において意識されることが望ましい。

謝辞

金原祐樹氏から『徳島県南海地震史料集』と『史料集 阿波海部取調録』をご提供いただいた。山中佳子氏からは拙稿にたいして有益なコメントをいただいた。同氏と松岡祐也・原田智也両氏は、拙稿の意味をご理解くださり、励ましてくださった。査読者の柳澤和明氏からは拙稿を改善するうえで参考になるコメントをいただいた。編集担当の白石睦弥氏にもお世話になった。以上の方々に感謝いたします。

対象地震:1605年慶長地震津波

文献

藤井容信・藤井彰民(編), 1975, 淡路草 下巻, 名著出版, 620 pp. (江戸期の写本「淡路草 八」は国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl>.)

- ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2561083)
- 林 忠・林 恕, 1919, 本朝通鑑, 第十五, 國書刊行會, 472 pp. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1920511>
- 今村明恒, 1942, 増訂大日本地震史料第一巻を読む, 地震1, 14, 89-94.
- 石橋克彦, 1983, 1605(慶長9)年東海・南海津波地震の地学的意義, 地震学会講演予稿集1983, No.1, 96. <https://historical.seismology.jp/ishibashi/archive/1605KeichoEq83.pdf>
- 石橋克彦, 1995, 古地震研究の問題点, 太田陽子・島崎邦彦(編)「古地震を探る」, 古今書院, 193-207.
- 石橋克彦, 2005, 日本の古代・中世の地震史料の校訂とデータベース化, 月刊地球, 27, 811-818.
- 石橋克彦, 2009, 歴史地震史料の全文データベース化, 地震2, 61, S509-S517.
- 石橋克彦, 2011, 1819年文政近江地震の全史料の表, 歴史地震, 26号, 65-83.
- 石橋克彦, 2019a, 1605年慶長津波を記す「阿闍梨晚印置文」の史料批判, 歴史地震, 34号, 31-40.
- 石橋克彦, 2019b, 1605年慶長大津波に関する阿波国宍喰の地震・津波記録の検討, 歴史地震, 34号, 115-126.
- 石橋克彦, 2019c, 同時代史料による文禄五年閏七月九日(1596.9.1)の伊予・豊後地震, 地震2, 72, 69-89.
- 石橋克彦, 2020a, 1605年慶長大津波の際の四国の地震動, 歴史地震, 35号, 77-84.
- 石橋克彦, 2020b, 『当代記』の地震記事の記録拠点—慶長九年の場合, 歴史地震, 35号, 31-38.
- Ishibashi, K., 2004, Status of historical seismology in Japan, *Annals of Geophys.*, 47, 339-368.
- 石橋克彦・原田智也, 2013, 1605(慶長九)年伊豆・小笠原海溝巨大地震と1614(慶長十九)年南海トラフ地震という作業仮説, 日本地震学会講演予稿集2013年度秋季大会, 108.
- 伊藤純一・都司嘉宣・行谷佑一, 2005, 慶長九年十二月十六日(1605.2.3)の津波の房総における被害の検証, 歴史地震, 20号, 133-144.
- 伊藤純一・都司嘉宣, 2007, 関東地方沿岸の「謎の津波」—慶長(1605)と延宝(1677)の房総沖津波の新史料, 歴史地震, 22号, 211.
- 鹿児島県維新史料編さん所(編), 1983, 鹿児島県史料 旧記雑録後編三, 鹿児島県, 1006 pp.
- 改訂房総叢書刊行会(編), 1959, 改訂房総叢書, 第1輯, 改訂房総叢書刊行会.
- 金子光晴(校訂), 1968, 増訂武江年表1, 平凡社, 256 pp.
- 片桐昭彦, 2018, 年代記にみる中世後期の地震—『常光寺王代記並年代記』と明応2年の地震—, 2018年前近代歴史地震史料研究会講演要旨集, 34-36.
- 高知県立図書館(編), 2003, 土佐国群書類従, 第五巻, 高知県立図書館, 514 pp.
- 古代中世地震史料研究会, 2017, [古代・中世]地震・噴火史料データベース(β版), 最終更新日2017年3月15日, <https://historical.seismology.jp/eshiryodb/>
- 黒板勝美・國史大系編修會, 1981, 新訂増補國史大系 徳川實紀 第一篇, 吉川弘文館, 772 pp.
- 京都史蹟會(編), 1918, 羅山先生文集, 平安考古學會, 468 pp. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/957400>
- 松浦律子, 2013, 1605年慶長地震は南海トラフの地震か?, 第30回歴史地震研究会(秋田大会)講演要旨集, 25.(歴史地震, 29号(2014), 263 に再録)
- 武者金吉, 1931, 上總岩和田大宮神社古記録抄(房総地震史料), 地震1, 3, 509-510.
- 武者金吉(編), 1941, 増訂大日本地震史料, 第1巻, 文部省震災豫防評議會, 950 pp.(復刻, 日本地震史料, 第1巻, 2012, 明石書店) 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1070653>
- 大森房吉, 1903, 八丈嶋及青ヶ島地災記録, 震災豫防調査會報告, 43号, 25-33(+付録8 pp.).
- 酒井信彦(校訂), 2006, 義演准后日記 第四, 史料纂集, 続群書類従完成会, 286 pp.
- 史籍研究会(編), 1983, 内閣文庫所藏史籍叢刊 特刊第一 朝野舊聞哀藁, 第十二巻, 汲古書院, 888 pp.
- 田井晴代(訳), 2006, 阿波国宍喰浦地震・津波の記録 震潮記, 田井晴代, 118 pp.
- 田山 實(編), 1904, 大日本地震史料 甲巻, 震災豫防調査會報告, 46号(甲), 634 pp.
- 寺尾英智, 2005, 勝浦市妙覚寺所蔵「上総国興津村 広栄山妙覚寺継図写」, 身延論叢, 10号, 54-67.
- 戸羽山翰(編), 1967, 増訂豆州志稿・伊豆七島志, 長倉書店, 641 pp.(明治期の「伊豆七島志 巻

中下」と「増訂豆州志稿 卷之一」が国立国会図書館デジタルコレクションにある)

東京大学地震研究所(編), 1982, 新収日本地震史料, 第2巻, (社)日本電気協会, 582 pp. 東京大学地震研究所図書室特別資料データベース http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/dl/meta_pub/G0000002erilib_L000968

東京大学地震研究所(編), 1989, 新収日本地震史料, 補遺, 東京大学地震研究所, 1224 pp. 東京大学地震研究所図書室特別資料データベース http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/dl/meta_pub/G0000002erilib_L000984

東京大学地震研究所(編), 1993, 新収日本地震史料, 続補遺, (社)日本電気協会, 1062 pp. 東京大学地震研究所図書室特別資料データベース http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/dl/meta_pub/G0000002erilib_L000986

都司嘉宣(編), 1979, 東海地方地震津波史料(I), 上巻, 防災科学技術研究資料, 35号, 436 pp.

都司嘉宣(編), 1981a, 高知県地震津波史料, 防災科学技術研究資料, 57号, 253 pp.

都司嘉宣(編), 1981b, 紀伊半島地震津波史料, 防災科学技術研究資料, 60号, 392 pp.

上田和枝・伊藤純一・吉住みずほ, 1996, 地震史料データベースの構築, 歴史地震, 12号, 11-18.

上田和枝・伊藤純一・吉住みずほ, 1997, 地震史料データベースの構築(2), 歴史地震, 13号, 1-4.

宇佐美龍夫(編), 1998, 「日本の歴史地震史料」

拾遺, (社)日本電気協会, 520 pp. 東京大学地震研究所図書室特別資料データベース http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/dl/meta_pub/G0000002erilib_L000989

宇佐美龍夫(編), 2002, 2005, 2008, 「日本の歴史地震史料」拾遺, 二, 三, 四ノ上, 590 pp, 822 pp, 1140 pp. 東京大学地震研究所図書室特別資料データベース http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/dl/meta_pub/G0000002erilib

宇佐美龍夫・石井 寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子, 2013, 日本被害地震総覧 599-2012, 東京大学出版会, 722 pp.

和歌山縣有田郡役所(編), 1915, 和歌山縣有田郡誌, 和歌山縣有田郡, 490 pp.(復刻, 1971, 名著出版)

山本武夫・萩原尊禮, 1995, 慶長九年(一六〇五)十二月十六日地震について—東海・南海沖の津波地震か, 萩原尊禮(編著)「古地震探求—海洋地震へのアプローチ」, 東京大学出版会, 160-251.

山中佳子, 2015, 新収日本地震史料および拾遺のDB化とその検索システムの作成, 第32回歴史地震研究会(京丹後大会)講演要旨集, 38.(歴史地震, 31号(2016), 205 に再録)

矢田俊文, 2015, はじめに, 前近代歴史地震史料研究会(編)「歴史学による前近代歴史地震史料集」, 新潟大学人文学部, 巻頭.

表1 1605年慶長地震・津波に関する既刊の全史・資料 (未刊の9史料を加えた)

Table 1. All the historical documents on the 1605 Keicho earthquake and tsunami printed in the existing Collections of Historical Earthquake Materials. Nine documents not included in the Collections are added.

No. ¹	Document name	Bibliographic information printed in each Collection ²	Rank ³	Place of mention	Explanation by the present author ⁴
●増訂大日本地震史料 第一巻 [武者(1941)] 所収の史料					
M1	義演准后日記	情報なし	A	京都, 江戸	醍醐寺座主・義演(1558-1626)の日記。*酒井(2006)
M2	薩藩舊記後編	情報なし	A	薩摩, 大隅	幕末～明治期に編纂された島津藩の編年史料集の後編。その中の「1978島津竜伯書状」が本津波史料。*鹿児島県維新史料編さん所(1983)
M3	當代記	情報なし	A'	遠江, 伊勢, 関東, 兵庫, 他	織豊期～慶長二十年の編年の記録, 17世紀前半に成立したと考えられている。石橋(2020b)参照
M4	伊豆國八丈島宗福寺古記	朝野舊聞哀藁所載	B	八丈島	『朝野旧聞哀藁』は文政二～天保十二年(1819-41)作成の徳川氏創業期(遠祖～家康)の官撰史料集。*史籍研究会(1983)
M5	八丈島記事	情報なし	Bか	八丈島	不詳
M6	東照宮實紀	情報なし	B	遠江, 伊勢, 八丈, 上総, 兵庫	江戸幕府が編纂した歴代将軍ごとの編年体実録(10代までの家康の編。1800年代前半に作成。*黒板勝美・國史大系編修會(1981)

to be continued

continued

M7	續本朝通鑑	情報なし	B	武蔵, 相模	江戸幕府編纂の神代以来の漢文編年体史書のうち醍醐～後陽成帝の部分, 寛文十年(1670)成立. 当該記事は卷二二八. *林・林(1919)
M8	孝亮宿禰日次記	情報なし	A	関東, 伊勢, 紫国	左大史・小槻孝亮(1576-1652)の日記. 石橋(2020a)参照
M9	置文寫	土佐國群書類従所載	A', B	崎浜, 土佐, 阿波	津波時に土佐国崎浜の談義所に滞在中の阿闍梨暁印が記した置文の写し. 石橋(2019a)参照
M10	三災録附録	土佐國群書類従所載	B	M9と同じ	『三災録』は土佐の歴史家・稲毛実による安政南海地震(1854)の地震誌. 附録にM9の異本を載せる. 石橋(2019a)参照
M11	谷陵記	土佐國群書類従所載	B	M9と同じ	土佐藩士・奥宮正明による宝永南海トラフ巨大地震(1707)の記録, M9の簡略化した異本を載せる. 石橋(2019a)参照
M12	房總治亂記	情報なし	B	安房, 上総, 下総	天正十五～十八年(1587-90)の房總の戦乱と地震・外国船難破を記す. 1668以前に成立. 作者不明. 地震を慶長六年とする. *改訂房總叢書刊行会(1959)
M13	武江年表	情報なし	B	房總	江戸神田の名主・斎藤月岑が幕末～明治初期に著した天正十八年(1590)以来の江戸の諸事の年表. 本史料集には, 原典の「慶長六年」を「九年」とするミスがある. *金子(1968)
M14	羅山先生文集	情報なし	A	遠江	江戸時代初期の儒学者・林羅山(1583-1657)の詩文集. その中の慶長十二年(1607)作「東行日録」が本津波史料. *京都史蹟會(1918)
M15	蒼屋雜記	情報なし	B	三崎浦(土佐)	「土佐国群書類従」巻五十三「伝記部」所収. *高知県立図書館(2003)
M16	阿波國社寺文書	海部郡鞆浦碑文	A'	鞆浦(阿波)	「鞆浦大岩津波碑」は徳島県海陽町に現存. 石橋(2019b)参照
M17	淡路草	情報なし	B	千光寺(淡路)	洲本藩の藤井容信・彰民父子による淡路国の地誌. 文政八年(1825)自序. *藤井・藤井(1975)
M18	伊豆七島志	情報なし	B/C	八丈島	『豆州志稿』の秋山富南が寛政三年(1791)に著わした『南方海島志』を萩原正夫が明治期に増訂. *戸羽山(1967)
M19	増訂豆州志稿	情報なし	B/C	仁科(伊豆)	秋山富南が寛政十二年(1800)に編んだ伊豆の地誌を, 萩原正平・正夫父子が明治期に増訂したもの. *戸羽山(1967)
M20	大宮神社古記録抄	○上總岩和田	B	岩和田(上総)	現千葉県御宿町の大宮神社の古記録から武者金吉が地震関連記事を抄出したもの. 武者(1931)
M21	和歌山縣有田郡地震津浪の記事	情報なし	C	広村, 辰ヶ浜(紀州)	本史料集の天正十三年地震の条に『有田郡誌』のほぼ同文がある(p.572). 今村(1942)が本地震津波の誤りらしいとした. *和歌山県有田郡役所(1915)
M22	突喰浦舊記	情報なし	B	突喰(阿波)	阿波出身の国学者・小杉樞郎が安政四年(1857)に個人蔵本を写して『阿波国徴古雜抄』に収載. 石橋(2019b)参照
M23	八丈島及青ヶ島地災記録	情報なし	Bか	八丈島	大森(1903). 記事は「八丈嶋年表」から抜粋
M24	伊豆半島地震史料	○福富孝治編	C	朝日村田牛(伊豆)	本史料集巻末の補遺の天文十三年十二月十六日の条にある. 今村(1942)に従い本地震のことと考える
●新収日本地震史料 第二巻 [東京大学地震研究所(1982)] 所収の史料					
S1▽	北川文書	「高知県史 近世史料編」 [S50・3 高知県]	B	M9と同じ	M9の書写
S2▽	佐賀町郷土史	[大塚政重著 S49]	C	佐賀(土佐)	正しくは, S40・9・1 佐賀町教育委員会. 「坂本弥次郎重金記」(不詳)の記事を引用
S3▽	浦戸港の沿革と其の史蹟	[松山秀美著「土佐史談 二十二」 S2・12・15 土佐史談会]	C	浦戸(土佐)	高知・浦戸港の話. 慶長九年に激浪があったと記すが, 具体性を欠き, 典拠不明
S4▽	土佐故事雜纂	[高知県立図書館蔵/寺石正路編]	D	—	土佐日記に現れる「大湊」の話, 「慶長中大変二□□」とあるのみで具体的な地震・津波記事なし
S5▽	土佐国編年略 上	[中山巖水筆 弘化四成立/S42・2・18 謄写印刷・発行 前田和男]	B	香美郡(土佐)	正しくは『土佐国編年紀事略』, 土佐藩士・中山巖水編著. 臨川書店の複製(1974)あり, 具体的な地震・津波記事なし
S6▽	南路志	[闔国之物 上, 下 武藤致和原著 / 文化十年ころ刊 S34・10・10 / S35・12・20 高知県文教協会]	B	浮津(土佐)	土佐国安芸郡浮津村(現高知県室戸市)の条に, 願船寺の寺記があり, 本地震津波のことがみえる
S7▽	佐喜浜村を語る	[小堀春樹著 S5・10・7 (東京) 賢文館]	D	—	近現代の記述
S8▽	羽根村史	[○高知県 十兵衛会, 山本武雄編 S32・12・20 安芸郡羽根村役場]	D	—	近現代の記述
S9▽	土佐国旧事記大集 上	情報なし	C	浦戸港修築	不詳. 「慶長十年波瀾」とあるが具体的な記事なし

to be continued

continued

S10	慶長の津波—阿波, 突喰の古文書	〔猪井達雄著／「歴史研究一九一」 S51・12・10 新人物往来社〕	B	突喰(阿波)	「慶長九年大津波年代書記」の全文が紹介されている。石橋(2019b)によりこの史料はB級とする
S11	土佐古今大震記 全	〔高知市立市民図書館蔵〕	D	—	M9の引用
S12	備後福山藩編年史料	〔土肥文庫 福山市市民図書館蔵／土肥 日露之進著〕	D	—	著者は1968年没の郷土史家, 具体的な地震・津波記事なし
S13	佐喜浜郷土史	○高知県〔S52・5・1 佐喜浜郷土史編集委員会〕	D	—	松野仁著, M9を引用した近現代の記述
S14▽	土佐古今の地震	〔寺石正路著 T12・11・15 土佐史談会〕	D	—	M9などを不正確に引用した地震解説
S15▽	安芸郡史考	○高知県〔安岡大六著 S30・11・3 安芸郡町村会事務局〕	D	—	M9などを引用した不正確な地震解説, 一部, 根拠不明
S16▽	田野文化史	○高知県〔安岡大六著 S27・12・25 田野町役場〕	D	—	不正確な近現代の記述
S17	奈半利町史考	○高知県〔安岡大六著 S28・10・1 奈半利町役場〕	D	—	不正確な近現代の記述
S18▽	大方町史	○高知県〔幡多郡大方町史編修委員会 S38・3・10 幡多郡大方町教育委員会事務局〕	D	—	不正確な近現代の記述
S19	室戸岬町史	○高知県〔安岡大六著 S38・12・10 安芸郡室戸岬役場〕	D	—	正しくは, S28・12 室戸岬町役場, 不正確な近現代の記述
S20	森村史	○高知県〔長野千春著 S30・12・20 土佐郡森村村史編纂委員会〕	D	—	杜撰な近現代の叙述
S21▽	室戸町誌	○高知県〔室戸町誌編集委員会 S37・12・12 室戸町史跡保存会〕	D	—	S6の記事を使った近現代の記述
S22	郷土研究徳島県誌	〔笠井藍水著 S3・8・20 徳島県郷土会〕	D	—	M16の再録
S23	名西郡志	○徳島県〔名西郡役所 T5〕	D	—	M16とM22の紹介
S24	徳島県史 四	〔徳島県史編さん委員会 S40・10・30 徳島県〕	D	—	史料の簡略・不正確な引用
S25	牟岐町史	○徳島県〔牟岐町史編集委員会 S51・3・31 牟岐町〕	D	—	杜撰な近現代の略述
S26	続阿波国徴古雑抄 一	〔徳島県立図書館編／金沢修監修 S46・3・1 (株) 出版〕	B	浅川村(阿波)	監修は金沢治, 「郡代所寛保御改神社帳」を掲載, Rankはこの史料のもの
S27	海部町史	○徳島県〔S46・12・1 海部町教育委員会〕	D	—	M16の再録
S28	突喰村誌	○徳島県〔S12・5・1 突喰村役場〕	D	—	正しくは, 佐藤幸雄・他編, T12・5・1, M22の再録
S29	元禄地震	〔S51 千葉県総務部消防防災課〕	D	—	『銚子市史』の引用, 有意な記事なし
S30	房総軍記	白子町史〔長生郡白子町史編纂委員会 S40・8・15 白子町〕	B	安房, 上総	『房総軍記』は18c.中葉作か, 地震を慶長六年とする
S31	私説 勝浦史	〔引田作蔵篇 S45・7・18 引田真〕	C	房総, 勝浦	『房総記』(江戸時代後期に成立か, 地震を慶長六年とする)を引用, そのほか論考あり
S32	長生村史	○千葉県〔長生村史編纂委員会 S35・10・20 長生村〕	D	—	M12を引用した近現代の記述
S33	九十九里町誌各論編 上	○千葉県〔九十九里町誌編集委員会 S55・3・15 九十九里町長〕	D	—	『関八州古戦録』(享保十一年(1726)横島昭武編, 地震を天正十八年二月十六日とする)を引いた近現代の記述
S34	睦沢村史	○千葉県〔睦沢村史編さん会議 S52・8・30 千葉県長生郡睦沢村〕	D	—	『房総記』(S31参照)を引いた近現代の記述
S35	鋸南町史	○千葉県〔鋸南町史編纂委員会編 S44・7・10 千葉県安房郡鋸南町〕	D	—	地震・津波記事なし
S36	長生郡土漫録	○千葉県〔林天然著 S28・2・11 大成会〕	D	—	正しくは『長生郷土漫録』, 『野史』(幕末に成稿した史書, 地震に関しては低質)を引用
S37	茂原市史	〔茂原市史編さん委員会 S41・8・15 茂原市〕	D	—	近現代の記述, 有意な地震・津波記事なし
S38	為信公御代日記写	津軽家文書〔国文学研究資料館蔵〕	Z	—	慶長十年十二月八丈嶋辺大山湧出の記事のみ
S39	八丈夷記 六	〔近藤富蔵著 S47・3・31 緑地社〕	B	八丈島	原本は, 江戸末期にほぼ成稿した八丈島の地誌, S39は「八丈年代記云, ……」としている
S40	安良里風土記	○静岡県〔清水直澄篇 S46・3・10 阿良里小学校・同校PTA〕	D	—	M19にもとづく記述
S41▽	掛川城概説	〔関七郎著 S50ころ〕	D	—	根拠の薄い推測を記す
S42▽	岳南史 四	〔(複製版) 鈴木寛馬編 S48・7・17 名著出版〕	D	—	原本は1931-35刊, 岳南史刊行会, M6の引用
S43▽	江馬氏と今切関所	「雄踏町誌資料編九」〔浜名郡雄踏町教育委員会S52・8・30雄踏町〕	D	—	根拠不詳の近現代の記述
S44▽	掛川志稿	〔齊田茂知・本山忠英原著 S47・3・14〕	D	—	伊豆宇久須の条, 具体的な地震・津波記事なし

to be continued

continued

S45	松阪市史	〔松阪市史編さん委員会編著 S52・12・10 松阪市〕	D	—	有意な独自記事なし
S46	南都年代記	『奈良市史編集審議会会報第二附録』(S40・11 奈良市史編集審議会)	Z	—	興福寺蔵『皇年代記』の影印。神代～寛延二年(1749)、慶長十年十二月八丈嶋大山湧出の記事のみ
S47	常光寺年代記	○三河・渥美郡堀切〔S36・12・31 霊松山常光寺〕	A	堀切村(三河・渥美)	天文十年(1541)に常光寺3世樹王がまとめ、以後代々の住職が書き継いだと考えられる(片桐, 2018)
●新収日本地震史料 補遺〔東京大学地震研究所(1989)〕所収の史料					
Sh1▽	慶長自記	『日本都市生活史料集成 七』	A	熊野, 関東, 桑名	慶長四～二十年(1599-1615)の桑名の記録
Sh2▽	熊野年代記	『紀伊 南牟婁郡志』	D	—	『紀伊南牟婁郡誌 上巻』(三重県南牟婁郡教育会編, T14; 覆刻版, 名著出版, S46) 所収。熊野年代記諸本から南牟婁郡に関する記事を寄せ集めたもの
Sh3▽	太地年代記	情報なし	D	—	庄司海村『太地』S32・6・20, 太地水産協同組合, のpp.133-149. 根拠不明で月が異なる短記事
Sh4▽	感恩碑の由来	情報なし	C	広村(紀州)	浜口恵璋編, S8・12・5, 戸田保太郎(広村長)発行。不確実な伝承を記す
Sh5	大地震洪浪見聞筆記他	徳島県立図書館・呉郷文庫	Z	—	海部郡鞆浦善弥寺九代住職が安政六年(1859)迄を記す。本件関係はUa4とほぼ同文
Sh6	牟岐村歴史資料 全	徳島県立図書館・呉郷文庫	D	—	1915刊。M22とM16による記述
●新収日本地震史料 続補遺〔東京大学地震研究所(1993)〕所収の史料					
Sz1	八丈実記 四	情報なし	B	八丈島	S39参照
Sz2	八丈嶋年曆	八丈町役場	B	八丈島	『八丈嶋小嶋青ヶ嶋年代記』を引用, 同年代記は『日本庶民生活史料集成 1』(1968, 三一書房)に収載
●「日本の歴史地震史料」拾遺〔宇佐美(1998)〕所収の史料					
—	徳島の地震津波一歴史資料から一	猪井達雄他著/S57・2・20/徳島県立図書館発行	—	—	本書名のもとに Ua1～Ua4 が掲載されている。本表では史料別に分けて掲げる
Ua1	慶長九年師走十六日震汐円頓寺旧記之写	永正九年八月四日 慶長九年十二月十六日 宝永四年十月四日 嘉永七寅年十一月五日四ヶ度之震潮記 ○穴喰	B	N5, M22と同じ	N5とM22(の原本に近い版か)を安政二年(1855)に書写したもの。石橋(2019b)参照
Ua2	阿州海部郡穴喰村新寺一寺駅路山円頓寺御建立成来旧記之事	穴喰町多田貞助氏所蔵の古文書で一枚ものであるが、裏面に慶長九年師走の震汐後のことが記されている	A	穴喰(阿波)	円頓寺の住侶が慶長四年(1599)に書いた1枚もので、裏面に本津波直後の様子が少し書かれている
Ua3	大日日記聞書	情報なし	B	穴喰(阿波)	穴喰の大日寺住持が享保六年(1721)に書いたもので、本津波に多少言及
Ua4	地震 津浪 嘉永録	情報なし	Z	—	阿波国海部郡牟岐の魚商人が安政三年(1856)に書いたもの, M16とM22を混ぜた不正確な写し
Ua5	穴喰町誌 上巻	穴喰町教育委員会編/S61・3・30 佐藤治海発行	C	穴喰(阿波)	『円頓寺開山住持有慶之旧記』(N5参照)の一部の現代語訳
Ua6	徳島県災異誌	S57・3・15 徳島県	D	—	角谷久五郎編, 徳島県史編さん委員会, M16を掲載
Ua7	慶長日記	〔○大津市雄琴 和田正所蔵/大津市歴史博物館〕	Z	—	十五日庚申の八丈島付近の洪波と大山湧出を記す。年月不明だが慶長十年十二月の事件だろう。但し干支は違う
Ua8	室戸市史 上巻	室戸市史編集委員会/H1・3・1 室戸市発行	D	—	M16, M9などを引いた近現代の記述
Ua9	熱田裁断橋物語	○名古屋市熱田区/S45・5・30	D	—	社本鋭郎編, 姥堂裁断橋保存会発行。書中の「西照寺累代行状年譜」の記事だが本地震とは無関係
●「日本の歴史地震史料」拾遺 二〔宇佐美(2002)〕所収の史料					
Ub1	熊野年代記古写	〔○熊野「熊野年代記」H1・9・1 熊野三山協議会/みくまの総合資料館研究委員会〕	B	熊野浦	慶長八年(1603)の条に掲出されている。「熊野浦大塩サス 云々」とあり
●「日本の歴史地震史料」拾遺 三〔宇佐美(2005)〕所収の史料					
Uc1	三嶋大明神棟札	○西伊豆町仁科/中西・矢野「地震」五十六巻(二〇〇三)95-97ページ	A	仁科(伊豆)	西伊豆町教委(1994)『西伊豆町誌, 資料第1集』所収, M19が抛った「佐波神社上梁文」だろう
●「日本の歴史地震史料」拾遺 四ノ上〔宇佐美(2008)〕所収の史料					
—	震潮記	徳島県穴喰田井家文書	—	—	史料名は「慶長九年師走十六日震汐円頓寺旧記之写」とすべきで, Ua1と重複。田井(2006)参照
Ud1	歴史探訪 南海地震の碑を訪ねて一石碑・古文書に残る津波の恐怖	H14・11・18/毎日新聞高知支局発行	D	—	M16の紹介・普及
●既刊の地震史料集に収録されていない史料					
N1	重宝記裏書	田辺恒之編『御宿町史料』S36・5・9, 御宿町 のpp.101-106	B	御宿(上総)	元文元年(1736)にまとめられたものを, 宝暦～安永時代(1751-80)に書写したのだろうという
N2	御縁起	千葉県鴨川市, 天面山西徳寺蔵	B	天面(安房)	伊藤・他(2005)が紹介, 享保十五年(1730)書写

to be continued

continued

N3	威徳院 大津波供養塔	千葉県南房総市和田町真浦	B	真浦(安房)	伊藤・他(2005)が紹介, 元禄津波の供養塔, 天保二年(1831)再々建
N4	上総国興津村広栄山妙覚寺継図写	千葉県勝浦市妙覚寺蔵	B	興津(上総)	伊藤・都司(2007)が紹介, 寺尾(2005)所収, 宝暦十一年(1761)書写
N5	慶長九年十二月十六日大変年代書記	阿波国宍喰の「円頓寺開山住持宍喰之旧記」の一部	B	宍喰(阿波)	S10とほとんど同じだが, 別史料と考えられる, 石橋(2019b)参照
N6	阿州宍喰浦師子吼山真福寺住僧大雲拜書 元文二丁巳年三月十四日	猪井・他『徳島の地震津波—歴史資料から—』1982・2・20, 徳島市立図書館 のpp.171-172	B	宍喰(阿波)	阿波国宍喰の真福寺(1912大日寺に合併)の住僧大雲が1707年宝永地震の30年後に書いたもの
N7	海部郡取調廻在録	徳島の古文書を読む会一班『史料集 阿波海部取調録』H29・5	B	海部郡(阿波)	岩村家文書, 天保十一年(1840)正月成立の地誌, 野口年長ら, 山本・萩原(1995)が用いている
N8	南朝以来地震抄録	徳島県南海地震史料調査委員会編『徳島県南海地震史料集』H29	B	海部郡(阿波)	徳島県立文書館蔵, 阿波・金磯新田(現小松島市)の多田家が所蔵, 安政地震後に作られた地震記録
N9	阿波志	国立国会図書館デジタルコレクション『阿波志』十二	B	海部郡(阿波)	佐野山陰編, 文化十二年(1815)完成の徳島藩撰の地誌

1, 下線付のM1~M13は田山(1904)にあるもの, ▽は都司(1979, 1981a, b)のいずれかからの引用(全部または一部); 2, “/” は史料集での改行を示す, [] 内は史料集巻末の“出典”の記述(一部省略あり), N1~9に関しては本論文著者による説明; 3, 本論文で付した史料等級(本文参照); 4, *は刊本で, 文献欄に掲載。ただし参照文献を示した場合は刊本があっても記さない; A級・A'級の史料は“No.” “Document name” “Rank”の欄を太字にした。D級・Z級史料は行全体を網掛けにした。